



岡村利平

岡村利平は、江戸時代末期の元治元年（一八六四）七月、国府戸長（村長にあたる）を務めた岡村俊平の嫡男として国府町広瀬町に生まれた。生家は、昨年まで旧国府診療所の建物が残っていた場所で、更地になつた現在もそのことを示す石柱が立つている。

利平は現高山市西町に下宿して煥章学校に通い、卒業後は地元の弘文学校に勤務した。その後、明治十五年には国府村戸長役場筆生として採用されている。

高山の文化を高めた人々

56

郷土史研究に生涯をささげた 岡村利平

元国府町教育長 酒井松彦

明治二十二年、二十五歳になつた利平は高い志を持つて上京し、東京医学専門学校（済世学舎）に入学することとなる。医学課程を修めた後さつそく帰郷し、明治二十六年、広瀬町において医院（内外科、眼科）を開業した。このころから、利平は多方面にわたつてその才能を發揮することとなる。

歌を寄せている。

「たのめこし 翁もいまは
世にまさで 誰にたづねむ
斐太のふるごと」

『岡村文庫『飛驒史料』』

利平が所蔵していた約千冊の書籍のほか、石器、土器、古瓦などの貴重な資料は、昭和十三年、建坪約四坪の土蔵とともに、遺族から国府村に寄贈された。

寄贈された数々の資料の中で特筆すべきは、利平自身が編纂した『飛驒史料』である。

『岡村利平顕彰碑』

利平の多大な功績を顕彰するため、昭和四十三年十一月、明治百年記念事業として「岡村利平翁顯彰碑」が、国府町の広瀬神社境内に建立された。

また、平成五年八月には、國府史学会主催による没後六十年祭が厳かに斎行された。当日は多くの関係者が偉業を偲んだ後、石原哲弥高山市教育長（当時）より利平の事績について講演が行われている。

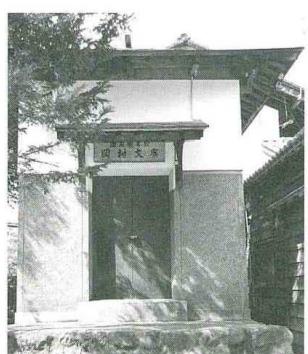
引用されている。

また、昭和二年には、幕末の元治元年（一八六四）から慶應四年・明治元年（一八六八）までの五年分について、『飛驒史料維新前後之二』として出版されている。

【飛驒史料】は、学術的にも極めて貴重な歴史資料であることから、昨年度、高山市によって専門的な保存処理が



顯彰碑(広瀬神社)



岡村文庫が収められていた土蔵